

現在、町では虫歯患者を減少させようと様々な取り組みを行っています。虫歯を持つ人の数はなかなか減らない状況です。そんな中、虫歯を持たない3歳以下の子どもの割合が年々増加しています。

これは、虫歯の性質が近年知られるようになり、保健福祉課と町内の歯科診療所が連携して、積極的に予防活動を行ってきたことが理由に挙げられます。

その結果、10年前は4割ほどしかいなかった虫歯の無い3歳以下の子どもが、5年ほど前から6割7割となり、昨年度には9割にまで上りました。

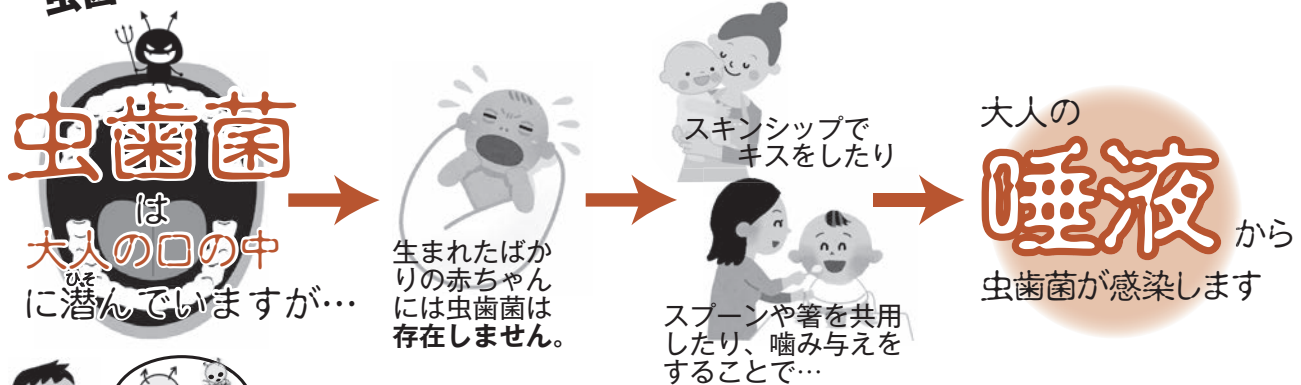
虫歯は『菌』ですので、どうやって感染するのかを理解し、意識的に行動すれば、町内の虫歯患者を減らすことに繋がります。

これを機に、家族で虫歯克服に取り組んでみませんか？



まずは知ろう！
虫歯の原因

虫歯はどこから来る？ 大人と子どもで違う、虫歯の考え方



口の内で2つの虫歯菌が連携プレー！その特徴から予防に迫る！

**虫歯菌その①
『ミュースタンス菌』**

歯の表面に吸着して、砂糖などの糖분을栄養に酸を出して歯の表面を溶かす虫歯菌です。この菌は、ラクトバチラス菌の入り口を作る役割を果たしており、ほとんどの人は幼少期に『大人の唾液』から感染します。

**虫歯菌その②
『ラクトバチラス菌』**

この虫歯菌は、単独で歯に吸着することができず、ミュースタンス菌が溶かした歯の表面から感染します。多くの食べ物に元々含まれているので、全く口に入れないことは不可能です。特に砂糖や乳製品など、糖分を多く取ると活動が活発化し、強い酸を出して虫歯を進行させます。

ミュースタンス菌が感染しやすい時期は・・・

【乳歯が生えそろう1歳～3歳】と【生え変わりの6～8歳】前後

2つの菌の特徴を見てみると、そもそも『最初に歯の表面を溶かすミュースタンス菌に感染しなければ虫歯にならない』ことが分かります。

この菌については、多くの人が幼少期に感染し、基本的に永久歯が生えそろう小学校高学年以降、新たな感染は起こりません。

それは、ミュースタンス菌を含む『様々な菌が歯の表面に定着する時期』が、歯の生え始めから生えそろう頃（乳歯は1歳～3歳前後、永久歯は6歳～8歳前後）だからです。

ここで重要なのは、『他の菌が定着している歯の表面にミュースタンス菌は感染できない』ということです。

最終的には、永久歯への生え変わりから1～2年の間に虫歯菌が定着しなければ、その子は『虫歯の少ない人』になります。

しかし、乳歯の段階で虫歯菌に感染した場合、高い確率で永久歯にも感染しますので、1～3歳の予防と治療は特に重要となります。